
チート少年リリカル純輝

ドライバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート少年リリカル純輝

【Nコード】

N3333K

【作者名】

ドライバー

【あらすじ】

チートな力を持った少年がリリカル世界で大暴れ！

注意、この小説は主人公チート&最強、原作ブレイク、ご都合主義です。（後、ハーレムにもなるかも）ですからそういうのが嫌いな方は回れ右をお願いします。

文才0な素人のド下手作品ですが、どうぞよろしくお願いします。

第0話 始まりの死亡（前書き）

どうも、ドライバーです、文才無いし、ド下手の素人ですが、よろしく願います。

今回は短いです、これから長くするようにします。

第0話 始まりの死亡

俺は中学生、15歳のごくふつうの少年、今、渋谷で服を買って秋葉原でi podを安く買った帰り・・・だったのだが・・・突然死んだ。分かりやすく言うと・・・轢かれた、猛スピードのトラックに。

「なぜだあああ!!」

叫ぶ俺、現在死んだ自分を見下ろしていた。そして絶叫、他にやりたいことあったのに・・・orz

「ね・・・ねえ・・・」

「ん？」

落ち込んでると、後ろから声をかけられた。目を向けると女性が立っていた。黒いロングヘアーでスタイルの良い25ぐらいの。

「もしかして君・・・今死んだ？」

「・・・そうですが？」

「アッチャー・・・」

突然額に手を当てて苦い顔をする女性。

「・・・どうかしましたか?・・・というかあなた誰？」

「私は・・・まあ、神ね。」

「・・・はい？」

突然とんでもない事を言う女性・・・マジで？

「うん、マジ。」

何気に考えた事わかってるし・・・すげえな・・・で、なんの用なんだ？神自らお出迎え？天使じゃなくて？

「やけに落ち着いてるわね・・・」

これでも驚いてるんですがね・・・

「まあいいわ・・・その・・・ごめんね。」

突然頭を下げた神・・・ホワッツ？

「実は・・・その・・・あなたが死んだの・・・手違いなんだよね。」

・・・へ??・・・まあ説明で大体分かった。天界で人を死なせるために人の名簿の名前を塗りつぶしてたら・・・間違っで死ぬはずでない俺の名前を塗りつぶしてしまったと。

「殴ってやろうか？」

青筋を浮かべて静かに怒る俺。

「まあまあ落ち着いて！お詫びに転生させてあげるから。」

「・・・へ？」

「もちろん元の世界で、は無理だけど、それ以外の世界で、後、お望みの力をあげる。」

「・・・アニメとかで原作破壊しますが？」

「かまわないわよ、ぶっちゃけパラレルワールドだからアニメとかの原作とは関係無いし。どんなのが良い？」

そうだな・・・遠慮無しで行くか。じゃあ、あらゆる神話とかアニメとかの作品の道具（兵器含む。）の想像可能。そして、あらゆる神話とかアニメに出てくる能力の使用が可能、後、ゲームとかの作品のモンスターとか幻獣を召喚する能力、そして純粹種のイノベーターで魔力は測定不能、身体能力は最強、というか超絶レベル、頭脳も超絶レベル、「答えを出す者」の能力も付けて、後デバイス作成とか工学の知識も。

「本当に遠慮しないわね・・・」

「後、相棒みたいなのが欲しいんだけど。」

「オツケー、じゃあこの子で。」

神が手をかざすとまばゆい光が出る。俺は思わず目をつぶる。そして、光が収まると、そこには、身長30cmほどの青白い長髪で翡翠色の眼をした美少女がいた。

「どーもー」

「・・・ユニゾンデバイス？」

「まあそんな感じね。後この子名前無いから付けてあげて。」

「そうだな・・・じゃあ、お前の名は・・・アリスだ。」

「わかりましたー」

俺の胸に飛びつくアリス。可愛いな・・・言っておくが変な気は無いからな、美少女を可愛いと思うのは自然だろ。

「後は他にある？」

「・・・いや、大丈夫だ、ありがとう。」

「OK、じゃあ、転生させるから頑張つて。」

「おう！・・・って、どうすれば良いんだあ！・・・！！！！！！」

突然足元に穴が開いて落ちる俺とアリス。

「うひゃあああ！・・・！！！！！！」

「てめえこういうのは先に言えええええ！・・・！！！！！！」

「頑張つてねー・・・そうだ、ついでだから容姿も超がつくほどのイケメンにしちゃお・・・あ、出生ミスった・・・ま、いつか」

・・・眼が覚めた。そこは、病院っぽい場所だった。そして、体に

違和感が・・・ん？抱かれてる？って・・・

「よしよし・・・」

「ふんぎゃああああ！！！！（赤んぼになつとるじゃねえかあああ
——！！！！）」

「私の可愛い息子・・・貴方の名前は・・・純輝・・・純粋な輝き
で・・・純輝。」

なんとという展開・・・大丈夫なのか？

第0話 始まりの死亡（後書き）

はいどうも、というわけで第0話です。なんかチートにしすぎた
ような・・・次は主人公達のプロフィールを書きますのでよろしく
お願いします。

第1話 神から依頼？（前書き）

ようやく1話投稿、文才が欲しいです・・・

第1話 神から依頼？

俺が転生して鶴神純輝つるがみじゅんきになってから4年半、俺は適当な広い場所にいた。

「さてと、アリス。」

「はいはい、マスター。」

アリスの力を試すため。

「ユニゾン・イン」

とりあえず結界を張ってアリスとユニゾンする。アリスとユニゾンすることによって、好きなロボットの能力が使える。（ちなみにニュータイプとかの能力も使用可能）とりあえず・・・

「ガンダムエクシア・ジャケットモード」

俺はガンダムエクシアの力を使う事にした。俺の体を刹那・F・セイエイのパイロットスーツと同じような

スーツ、そしてその上に白と青が基調のバリアジャケットが包み、右腕にGNソード、他にもエクシアと同じ武装が装備されていた。これはジャケットモード、元の機体の力は半分しか引き出せないが、体に負担はかからない形態。

「よし・・・ガンダムエクシア、アーマーモード。」

俺の体が光る。光が収まると、俺の体をガンダムエクシアと同じ

姿の鎧が包んでいた。これはアーマーモード、元の機体の力が100%引き出せるが、体に大きな負担がかかる、ここぞという時の形態。負担は元の機体の性能に比例して大きくなる。

「なるほど・・・こりやすげえな。」

「当然です」

アリスが笑顔で言う。とりあえずユニゾンアウトしてアリスの頭を撫でる。

「〜」

眼を細めて喜ぶアリス、可愛い奴だ。

「お、いい感じねー。」

聞き覚えのある声が響く。後ろを向くと、俺をこの世界へ送った神がいた。

「はい、お久しぶり」

「なぜここにいる？」

「いやー、あの後天界に戻ったら、上の神から『自分が転生させた人間の面倒は最後まで見る！』と、怒られちゃって・・・」

「そうか・・・」

見るからにいいかげんだったしな・・・無理も無いか。

「そついえばこの世界って、どんな世界なんだ？」

聞きそびれていた事を聞く。

「簡単に言えば、『魔法少女リリカルなのは』の世界よ、ちなみに無印の4年半くらい前ね。」

まじで！！ラッキー、俺あの作品けっこう好きだったんだよなー、納得いかないヶ所もあったが。まあ介入してその辺ブレイクすりゃいいか。

「なにやら恐ろしい事考えてるわね・・・まあいいわ、ちなみに私の名前エルだから、何かあったら呼んでね。」

そつ言つて消えるエル。多分用は無いと思うが・・・さてと、能力のテストをやりますか。俺は右腕の肘から上を前に突き出す、その手首には黒いプレスレットが巻かれていた。そして、上空からコーカサスゼクターが飛来し、プレスレットに装着される。

「変身！！」

ガチャッ

〔hensin〕

俺の体をコーカサスの鎧が包む。

〔change, beetle〕

仮面ライダーコーカサスに変身する。なぜコーカサスかって？見た目好きだから。

「かつこ良いです、マスター」

眼を輝かせるアリス、俺も結構気に入ってるんだよな、何気に蒼いバラを構える。そんなキャラじゃないけどね、俺。バラはどっから出したかって？暗黙の了解をお願いします。

「よし、帰るか。」

変身を解いて俺はアリスと共に帰路についた。そして家に到着。

「ただいま。」

「おかえり。」

居間で母さんがビールを飲んでいる。どうやら風呂上りらしい。

「また酒飲んでるの？」

「いーじゃん、子供のくせに固いこと言わない。」

アル中になつても知らねえぞ。俺の母さんは見た目は18歳ごろにしか見えないが、実は26の頃に俺を生んだ、そのため実は三十路を超えている。すげえな、翠屋の婦人といいムツツリの母といいこの世界の女性はなんでこうも若いんだ？・まあどうでもいいか。そして母さんは拳法使いですげえ強い、この間も襲ってきた男10人をコテンパンにのした。前にも昔御神の剣士と互角に渡り合ったのだ言っていた。・・・本当ならすげえな。

（そついや後半年ぐらいでなのはの父親が大怪我するんだよね・・・）

（介入しますか？）

念話で語りかけるアリス。まあそうするかな、そのためでもあるし。つーか、なのはの兄はなにやってんだ？親父がいないからこそ妹の面倒を見るべきだろうが！まあその辺は後でどうにか・・・として。

「半年は暇なんだよなあ・・・デバイスを完成させるか。」

前から作ってたんだよなデバイス。密かに異空間に作っておいたラボに入る。入り方は俺のみぞ知る。ネギまの超のラボ（高畑とちびせつなが閉じ込められた所）のような感じ、俺が指を鳴らすと色々機械の乗った作業台が現れる。

「じゃあアリス、頼んだぜ。」

「はい、リアルモード！」

アリスが普通の人間のサイズになる。ここではアリスは俺の助手みたいな者である。けっこう優秀。

「じゃあまず、ここをこーして・・・あ、ミッドとベルカどっちに・・・うーん、混合させるか！・・・えーと、それからこうして・・・アリス！その赤い奴取ってくれ。」

「はい、これですね。」

「おう、それからこーして・・・おし、後はエネルギーを注入・・・アリス、スイッチオン！」

「イエッサー！」

ガチャン！ヴィイン・・・

アリスがレーザーのような機械のスイッチレバーを入れる。機械の先に膨大なエネルギーが収束される。これは機械にエネルギーを注入する機械である。

ズビイイイ！！！！

デバイスに向かってビームが打たれる。どっかで見たような・・・なんたら。

「出来ましたよ。」

お、完成したな。待期状態は銀色の**髑髏**^{ドクロ}のペンダントだ。髑髏の内部に黒いコアがある。性格は・・・ランダムにしてみた。その方が面白いから。

「よう、お前がマスターか？」

・・・なんかすげえ乱暴な口調になっちった。コアに文字が浮かぶのではなく、言葉に合わせてコアが点滅する。

「おい、聞いてんのか？」

「お？・・・ああ。」

「やけにテキトーだな・・・まあ、一応従ってやるがな、マスターだ
しよ。」

「・・・じゃあ、まずテストしてみよう、セット・アップ！」

デバイスの性格はおいといて・・・俺の体を光が包む。そして、俺の姿はFF7のクラウドの肩あてが無い＋半そで＋襟なしver.の上にデビルメイクライのダンテのコートの黒ver.を羽織った服装（コートの右の袖は肘まで捲くっている）、手にはクラウドとダンテを合わせたようなグローブ（手がダンテで穴の開いた部分に銀の金属板、手首の部分がクラウド）を着けていた。そして、背中には鎧に髑髏の装飾が付いたデカイ大剣。鎧のコアを髑髏で覆っている。

「どうよ！」

「ふーん、なかなか良いじゃん。」

「当たり前よ、俺のセンスは一級品だぜ。」

「そうはおもいませんが。」

「ああ？なんつったチビ！」

「な！チ・・・チビって・・・」

「チビにチビと言って何が悪いチビ！」

「ムキー！何を言っんですか、この下品ドクロ！」

「言っ たな！クソガキ！」

「やめろ！お前ら！」

この二人馬が合わなそう・・・不安になってきた。

「まあ、機能とか形態とかは後々追加するとして、名前をどうするか・・・」

「かつこいい名前を頼むぜ。」

「じゃあドクちゃんはとうですか？」

「てめえは黙ってろ。」

「うーん・・・じゃあ、レクイエムでどうだ？」

「鎮魂歌か・・・悪くねえな、良いだろう。」
レクイエム

「じゃあよろしくな。」

「おう！」

俺はレクイエムを待期モードにしてラボを出る。すると、どこからかエルが出てきた。

「やっほー。」

「・・・何の用だ？」

「・・・なんか冷たいわねー。まあいいわ、ちょっと頼まれてくれない？」

「断る。」

「報酬は充分に出すけど？今の状況をなんとかしてあげなくもないわよ？」

「・・・」

正直生活に困ってた。父さんが死んでから母さんは無職でフリーター。

「まあいい・・・何だ？」

「こっちの神がちょっと大失敗をやらかしちゃってねー、色々な世界に色々な怪物が現れちゃったのよ。」

「なんで自分達で解決しない？」

「私達がやると私達の存在が公になっちゃうかもだから、下界のちようどいい人物に頼む事にしたのよ。」

「で、俺に白羽の矢が立ったと？」

「うん。」

こいつの天界はなぜにこうテキトーなんだ？

「そんなもんよ、神なんて。」

心を読みやがった、こいつ・・・

「じゃあまず、これからおねがい。」

エルはそう言って怪物の絵を見せる。ライオンのような体に赤い鬣、というかこれって・・・

「ヴァジュラ!？」

ゴッドイーターのアラガミ、ヴァジュラだった。

「なんでこれが？」

「ゲームとかの怪物も含まれるってこと。」

「じゃあまさかあれも・・・」

怪獣王^{モンスター}とかも現れるのか？出来るならやりたくねえ。

「出るかもね。」

「いちいち読むな。で、どこに行けばいいんだ？」

「この世界よ。」

その世界は今の地球と同じほどの科学文明を持った世界だった。

「言っておくけど、これだけじゃないから、じゃあ、たのんだわよ。」

「おい、待て、まだ準備・・・」

シュン

一瞬で送られた俺達、あのアマアアアア！・・・かくして、新たな使命？を押し付けられたのだった。はてさて、どうなる事やら。

第1話 神から依頼？（後書き）

とりあえず、次回はなのは、そしてアリサ達と（テンプレどおりのフラグ立てという名の）遭遇。引き続きよろしく願います。

主人公達の設定（前書き）

遅くてすいません。主人公達の設定です、これから増えるかも。

主人公達の設定

主人公

名前 つるがみじゅんき
鶴神純輝

年齢 なのは達と同じ

容姿 顔 すごい美少年（エルの気まぐれでこうなった。）

髪 FFのクラウドみたいなツンツンだが、少々ウルフヘアみたいになっている。色は白銀、ユニゾンすると緑に変わる。

眼 若干吊りぎみの赤い眼、ユニゾンすると右が金に、左が銀になる。

体格 すらつと細身だが、それなりに筋肉はついている。
無駄な肉無し、同年代では背が高く、実年齢より少し上に見える。

CV 内山昂輝

魔力資質 EX（測定不能）

魔法術式 ミッド式、古代ベルカ式、バビロン式。（バビロン式とは、二つの術式を元に純輝が創ったオリジナルの術式、様々な属性の魔法が使える上にミッドとベルカ、両方の長所を併せ持つ。名前はカッコいいから決めた。魔方阵の形はまんま遊戯王の『六芒星の呪縛』）

身体能力 超絶（生身で仮面ライダーと戦える。普段は魔法でセ

ーブしてる。)

頭脳 超絶(デュフォー以上、アンサーカード答えを出す者付き)

能力 色々な作品の能力や技を使ったり、アイテムを想像したり出来る。(まれにマシンを想像して自分なりに改造したりしている。)
(ちなみに純粹種のイノベーター(なんともなりましたかしらしい。))

性格 基本的にはアバウトで優しいが、けっこう喧嘩好きで傍若無人な一面もあり。

仲間たち

名前 アリス

容姿 顔 ふつうに美少女

髪 青白い長髪

眼 垂れ気味の翡翠色

体格 背はリンやアギトより頭一つ高い、スタイルは下の中くらい。。

CV 折笠富美子

魔力資質 SSS+

魔法術式 純輝と同じ。

能力 いろいろな作品の技が使える。（但し、なぜか魔法限定）

性格 純輝にべったり、基本はおとなしく明るいが、早とちりな一面があり、よくそれで純輝に注意される。

備考 エルが純輝のために生み出した純輝専用のユニゾンデバイスで、純輝とのユニゾンにより、好きなロボットの技や能力が使えるようになり、魔法の威力も倍以上に上げる事が出来、単体での戦闘能力もオーバーSランク魔導士をはるかに上回るこれまたチートの融合騎。

デバイス

名前 レクイエム

分類 戦闘用多機能統合人格搭載試作型ハイブリッドデバイス（アームロボットの武器としての性能とインテリジェントデバイスの魔法補助性能にブリストロボットの機能も付けた万能型デバイス）

AI 男

声 中井和哉

見た目 待機状態 黒いコアを銀色の髑髏で覆ったペンダント

1stフォーム ブレイカー 両刃の黒い馬鹿でかい大剣、バルディッシュのザンバーフォームより一回り大きい。

2ndフォーム イレイザー デザートイーグル並の大きさの真っ黒い二丁拳銃

3rdフォーム ジェノサイド ブラストインパルスガンダムofケルベロスのような二つの大砲、遠距離の砲撃に特化。

4thフォーム アサシン 日本刀のような刀、黒い柄に髑髏が口を開いた形の塚、髑髏の開いた口から刃が伸びている。刃は伸縮自在。

フルドライブ ハルマゲドン 禍禍しい2メートル程の片刃の大剣（先のほうが鎌のように外側に曲がっている）を二つ持っており、二つつなげることで砲撃の使用が可能。

バリアジャケット F.F.7のクラウドと同じ服装（但し、肩あてが無く、半そでで襟は無い）の上にダンテのコートの黒いバージョンを羽織っている。そして手には手の甲と指の付け根の部分に金属板の付いた黒いフィンガーレスグローブ、手首の部分にクラウドと同じアーマー。

材質 オリハルコン

機能 ???（他にもあるが、無印では使わない。）

性格 他のデバイスに比べて我が強くて荒々しく、口調も荒いため、従順というわけではないが、なんだかんだ言って結局純輝を信頼している。しかし、アリスとは仲が悪く、口喧嘩が多い。ちなみに会話する時はコアに文字が浮かぶのではなく、言葉に合わせてコアが蒼く点滅する。

備考 純輝が自分用に作った試作型のデバイス、説明からしてチートキャラのために作られたようなチートデバイスであり、人工知能の性能や補助性能もレイジングハートやバルディッシュをはるかに上回る。頑丈さにおいても桁外れであり、スターライトブレイカー以上の砲撃を撃つても全然負担にならない。（元々純輝の化け物級のチートな魔法出力に耐えるように出来てるので）

主人公達の設定（後書き）

なんか自重をやめたらこうなった・・・まあいいか、後悔はしてません。

第2話 大変な一日（前書き）

どうも、遅くなりました。どうぞ。

第2話 大変な一日

あれから半年、俺はなんとなく公園に来ていた。すると、茶髪の女の子が泣いてるのを発見、あ、そっか、時期的にこの時期だっけ？なのはが一人になるの、見て見ぬふりもなんだしとりあえず声かけるか。

「どうしたんだ？こんな所で泣いて。」

「ふえ？」

顔を上げるのは。

「良かつたら、話を聞こうか？」

「えっとね、お父さんが仕事で大怪我して入院しちゃったの・・・」

「お母さんは・・・？」

「お母さんはお店が忙しいの、お姉ちゃんも、お兄ちゃんは・・・」

兄の事を話そうとした瞬間沈黙、その表情は明らかに怯えていた。

「怖い・・・？ お兄ちゃん。」

「・・・うん・・・」

ほっぽり出すだけじゃなく怖がらせるとは・・・なのはの兄はいっちょ ぶち殺 お話 しとくか。

「それで一人なんだ・・・じゃあさ、俺と遊ばない？」

「え・・・？」

驚いた表情。

「遊んでくれるの・・・？」

「もちろん。」

「わあ！ありがとう！」

一気に明るくなった。やっぱり寂しかったんだな・・・

「じゃあ、きみの名前は？」

「なのはの名前はなのはなの！」

「俺は、鶴神純輝、よろしくね。」

それから俺らは色々な話をして色々遊んだ。そしてその後、俺はこっそり土郎さんのいる病院に入って、土郎さんの体に治癒魔法（体の治りがメチャ早くなる）をかけた。さすがにいきなり治ったら不自然だしな。

そして、ある日の休日、俺は道を歩いていた。

「キャアアーーーー！！！！！」

・・・なんだ？暴漢か？ふと後ろを向くと車が一台猛スピードで通りすぎる。その中には、金髪の少女・・・あれ？・・・アリサじゃね・・・？

何やってんだ？行かねえのか？

喋るレクイエム、当然行くぜ！

ふっ・・・だろうな。

とりあえず運転手のおじさんが怪我してたから病院まで送った後、すぐに飛んで追跡する。

「レクイエム、アリサの位置は？」

北北西に3、527kmだ！

「OK！」

全速力で飛ばす。

あの廃ビルだ！

レクイエムがレーザーを一つの廃ビルに当てる。

「分かった！」

窓からビルに突っ込む、中には縛られて猿轡をされているアリサ、それとガラの悪い男が数名。とあれ？・・・あの紫の髪の女の子・・・すずか！？・・・WHY？《ホワイ》・・・何で？

「運がよかつたな・・・」

「ああ・・・まさか月村のお嬢まで手に入るとは・・・これでますます利益が上がるし・・・何より楽しめるな。」

「チツ・・・ロリコンが・・・ま、そう言う俺もだけど・・・」

なんて驚いてる場合じゃねえな・・・

「おい。てめえら。」

「あ・・・なんだてめえ!？」

「ガキがなんの用だ？」

「さあな・・・これから悪人を倒すから・・・正義の味方って所か？」

そう言いながら俺はディエンドライバーを取り出し、カードをセツト。

《カメンライド：ディ・エンド》

ディエンドに変身。

「なんだありやあ？」

「こけおどしか？んなもん通じるか!」

様々な武器を取り出す男達。悪いけど・・・

「てめえらの相手はこいつだ！」

《カメンライド：ライオトルーパー》

ライオトルーパー3体を召還。

「な・・なんだ？」

驚き戸惑う男達。

「頼んだぜ。」

『ハッ！』

突っ込むライオトルーパー達。その間にアリサとすずかを救出・
ん？すずかの頭に血が・・

「なあ、おい。」

俺は手近な男に聞く。

「ああ！？なんだ？」

「この子殴ったの・・誰だ？」

「俺だよ、散々暴れたそいつが悪いんだからな！」

そうか・・掴まえるくらいで許してやろつとおもったが・・やめた・・

パチン

俺は指を鳴らす。すると・・

ドガアアン！

俺が改造したKMF、ガウエインがラボから転送される。ガウエインは腕を突っ込んで男を驚掴みにする。

「な・・なんだこりや！？・・が・・あ・・ギャアアアア！！」

ベキボキバキ

ガウエインがそのまま指を動かして男の腕やらあばら骨を砕く。そしてそのまま離す。どうやらライオトルーパーによって他の奴らも捕まったようだ。すずかは気絶でアリサは・・眼が点になっている。まあこんだけ非現実的なのを見せられちゃあな。反省、反省、しかし後悔はしていない！

レクイエム 何言っただか・・

若干呆れ気味のレクイエム。とりあえず二人の拘束を解く。

「あ、あんたいつたいなんなのよあれ！」

詰め寄るアリサ、落ち着け。

「落ち着けるわけないでしょ！その服もあの変な服連中もあのロボットもなんなのよ！」

変な服連中で・・・ライオトルーパーか？ん？ロボットって・・・

（なあレクイエム、俺、ガウエインの迷彩・・・）

忘れてたな、思いっきり、安心しろ、周りにや誰もいねえ。

（そっか、良かった。）

「ちよつとあんた、黙ってないで説明・・・」

とりあえずアリサを眠らせた後、二人を家まで送った。犯人共は警察へGO、今日は色々大変だったなあ・・・アリサと再開した時大丈夫かな・・・

自重しなかったお前の自業自得だろ。

るせい。

第3話 想定外、しかしボツコボコ。（前書き）

原作キャラとの遭遇です。（予定外の）

戦闘シーンがきつい・文才が・欲しい。

感想の受付を制限無しにしました。（ユーザのみになってたのは間違いです。）

第3話 想定外、しかしボッコボコ。

あれから4年とちょっと、俺は砂漠世界でスケルトン数体と戦っていた。

「メガグラビトンウェーブ!!」

俺はスケルトン共を引力で引き寄せて全身からのエネルギー波で全滅させる。

「よし、片付いたな。」

はっ！物足りねえな。

「所詮はザコだからな。数だけだよ。さてと、アリスはどうかかな？」

アリスには別の方を任せておいた。まあ問題ないと思うが・・・と
りあえず念話。

（マスター！助けてくださーい！！）

（！？ どうした！）

まさか新手のモンスターが！？

（突然知らない人が現れ…きゃあ！！ バインド・・・）

知らない人・・・？ まさか・・・とりあえずそこに向かう。

そして俺は到着…まさか、こんなに早く会うとはな…

「おまえがこのデバイスの所持者か？」

クロノ・ハラウンがアリスを捕らえていた。

「てめえ、俺の家族をどうする気だ？」

「このデバイスからはSSSオーバーの魔力を感じる、だから管理局が確保するんだ。」

「は…な…し…て…。」

「ふざけんな！誘拐がてめえらの仕事か！！」

「うるさい！お前には無許可での魔法行使もあるんだ！逮捕されな
いだけ有難いと思え！」

ブツツイーン

ドゴン！！

「ぐはっ！！」

カチンと来たからとりあえずアリスを奪い返して腹に蹴りを入れて吹っ飛ばす。

「うえーん、マスター。」

「よしよし…。」

アリスの頭を撫でてやる。

「くっ・・・貴様、公務執行ばう・・・」

ドカン！

「があ！！！」

今度は顔面に蹴り。

ガツン！ ドゴン！ ドン！！

そして左右から顔面にフックを決めた後、腹にもう一度前蹴り。
許さねえ・・・

「マスター！！！」

アリスに呼ばれる。

「私も・・・」

「ああ。」

「「ユニゾン・イン！！！」」

ユニゾンして機体をイメージ、俺が変身したのは・・・青い体、白い角とヒゲ・・・ソウルゲインだ。

「くっ・・・」

立ち上がるクロノ、しかし、バインドで拘束。

「な!!」

「終わりだ・・ソウルゲイン!フルドライブ!!」

両手にエネルギーを溜め、飛び上がる。

「いけえ!!」

両手から連続で多数のエネルギー弾を打つ。

チュドドドドドドン!!

「うああああ!!!!」

「はあっ!!」

ガン!!ドゴン!!バキッ!!ドカカカカン!!

煙の中に飛び込んで連続で殴り飛ばす。

ブワア!!

殴り飛ばしたクロノが煙から出る。俺はそれを追って -

「はあ!!」

ガンッ! バキッ!

「がは！」

「せえい！！！」

ズガッ！ ガンッ！

「げふう！」

「でええいつ！！！」

ゴンッ！ ガッ！ ガスッ！

「っがああ！！！」

「うおおおお！！！」

ガガガガガガガン！！

「うああああ！！！」

ガンッ！！

「かはあ！！！」

拳や蹴りを連続で叩きこんだ後、クロノを上空へ吹っ飛ばす。そして俺は、両腕のブレードにエネルギーを溜める。

「リミット解除！ コード麒麟！！！」

そして俺は、クロノに向かって飛び上がり -

「でいいいいやつ!!」

ザンツ!!

右腕のブレードで切り裂く。クロノはそのまま地面に落ちて、意識を失った。

「はっ! 殺されないだけ有難いとおもいな。」

そして俺はそのままにして転移する。何か呼び止めるような声が聞こえたが、無視して自宅に飛ぶ。もちろん、追跡は出来なくしておいた。そして、自宅に戻った俺は -

バフツ

「マ、マスター!?!」

あー、疲れた・・・やっぱ高性能な機体のアーマーモードはきついな・・・

ていうか俺の台詞あれだけかよ。

第3話 想定外、しかしボツコボコ。(後書き)

これが原因でクロノはあのシーンでもボコられます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3333k/>

チート少年リリカル純輝

2010年10月10日15時49分発行